



IUFRO-J NEWS

No. 10 (1980. 2) —

第 17 回 IUFRO 世界大会の運営要綱きまる

まもなく、全世界のユフロメンバーに第 17 回世界大会のファーストアナウンスメント（第 1 回公告）が配布される予定です。これは、IUFRO 本部が発行している IUFRO NEWS の No. 27 として印刷されますが、会員の皆さまに届くのは早くても 3 月になると思いますので、本号をかりてその概要をご説明し、大会がどのような形で運営されるかをご理解いただくことにしました。

I. 日本の大会準備実行組織図

細部についてはこんご改変されるかも知れませんが、骨格は下図のようになっています。

II. 大会の目的

① 研究交流、② 前回(第 16 回)大会以後の活動状況の集約、③ 次回(18 回)大会までの活動方針と組織体制の検討、④ 会員を主とした研究者、技術者の親睦などが主なものです。

III. 会場と日程

会場は京都市左京区室池の国立京都国際会館で、同時通訳を準備する大ホール(2000 人収容)と 2 つの中ホールのほか 33 の中小会議室をそれぞれ全体会議、部会集会、研究集会に当てます。会館内には食堂、喫茶室、医務室のほか、旅行社、銀行、郵便局等も臨時に開設されます。

日程

1981 年 9 月 6 日(日)~17 日(木)

9/6 日(日) 評議員会、参加者登録

7 日(月) 開会式、午後から研究集会、夜は歓迎パーティー

8 日(火)~11 日(金) 特別講演、研究集会

9 日(水) 午後は親睦を深める行事を予定

12 日(土) 閉会式、さよなら昼食会

13 日(日)~17 日(木) エクスカーション

(詳細は本誌 No. 9 の 3 ページを参照)

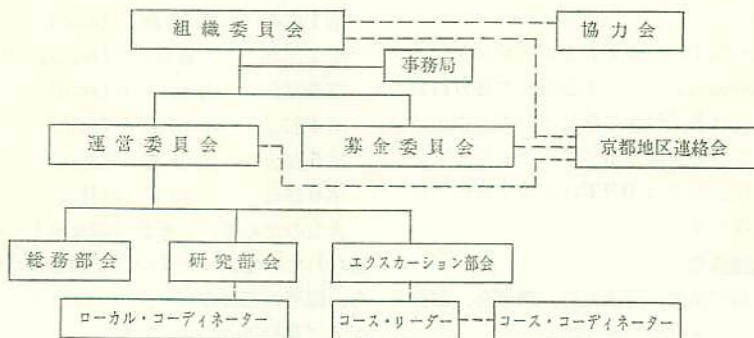
IV. 研究集会

研究集会のプログラムは今年 9 月モスコウ市で開催を予定している理事会において検討され、大会分科会の名称(討議課題)と部屋割りが決まるはずですが。

研究発表の形式には次の三つがあります。

1. 招待論文 (Invited Papers)

各大会分科会ごとに原則として 1 半日 (2 時間 30 分) に 1 題の招待論文をきめ、(今秋以後) それを中心として発表と討議が行なわれます。招待論文の内容は、大会までに部会別に印刷して配布するプロシーディングズ (要旨集) に載ります。一論文の長さは A4 版タイプ用紙 12 枚以内で原稿締切は来年 3 月末です。



2. ボランタリーペーパー (Voluntary Papers)

討議論文などによられているもので、大会分科会の討議課題に関連した内容のものであれば、大会参加者は自由に論文(タイプ用紙6枚以内)を持参することができます。ただし、その取扱いは大会分科会の座長の判断にまかされており、部会の慣行や時間の関係で、すべてについて口頭発表の機会が認められるとは限らず、そういう場合は論文を配布するだけになります。従来状況から考えて、組織委員会としては、発表の意志のある方には、本大会の新しい試みであるポスターセッションへの参加をおすすめします。ボランタリーペーパーは、大会後に出される大会経過報告のプロシーディングズに著者・所属・題名のみが載せられます。(なお、積極的なスポンサーのついている分科会や専門研究会では、大会後に独自にボランタリーペーパーを含む論文集を出版しているようです)。

3. ポスターセッション

幅170cm×高さ110cmの掲示スペースに著者が図表・写真・説明文を貼り、定められた時間その前にいて、質問する研究者に説明したりサンプルを見せたり研究交流を呼びかけたりするものです。メリットとして図表やサンプルに接近して見ることができる、時間的余裕があり討論内容が深まる、議長を介さず個人対個人の話し合いが中心で、研究者のつながりができやすい、などの諸点があります。プログラムでは同じ専門分野の大会分科会とポスターセッションが同時に行われないように計画しており、沢山のポスターが並んでいる会場へ関心のある参加者が多数参加できるよう配慮します。

(なお、ポスターによる発表形式は今年4月2~4日筑波大学で開催される第91回日本林学会大会でも採用しています。)

ポスター発表希望者は来年初頭に配布予定のセカンダリーキュラー(第2回公告)に同封する用紙にアブストラクト(要旨)を書き込むこと。締切は来年3月末です。要旨はすでに述べた部会別のプロシーディングズにあわせて印刷されます。)

要約しますと、招待論文の口頭発表とボランタリーペーパーの配布または口頭発表は、中小会議室で各分科会にわかれて行われ、それと並行する形で半日ごとにテーマまたは部会をかえて別の会場でポスターセッションが行われます。なお、提出原稿はIUFROの論文書式に従って作製しなければなりません。

V. その他の大会諸会合

開会式、閉会式、特別講演、評議員会、理事会、部会ミーティングなどが予定されています。

VI. エクスカーション (別項で紹介)

VII. 費用その他

大会参加費(宿泊・交通・エクスカーションを除く)は1人あたり35,000円の予定(来年5月1日までに前払いすれば30,000円)。夫人など同伴者には10,000円の参加費が予定されています。

エクスカーションの経費はコースによってことなり、1人60,000円~150,000円が見込まれています。

外国からの参加者については、日本交通公社が指定業者として宿泊および交通関係の世話をします。

また京都市内および近郊の観光、茶の湯、七宝焼きなどを会期中同伴者のために計画する予定です。

VIII. 注意

大会参加希望者はファーストアウンスメントに添付の質問カードに書き込み、組織委員会事務局へ送っていただくことになっており、その締切は7月1日の予定です。

リーゼ会長近く来日

松井組織委員長への連絡によると、リーゼ会長が3月上旬に来日される。中華人民共和国の林業科学院の招きに応じられたもので、この機会に、第17回世界大会の開催に関連して組織委員会、協力会などの打合せや関係筋への表敬訪問のため訪日される。日下のところ、滞日は3月1日から5日間になる模様である。

“ローカル・コーディネーターについて”

本誌8号の5ページにIUFROの組織と役員の英和対訳をのせましたが、大会時の研究集会の編成、運営を円滑にするため、6研究部会の部会長(Divisional Coordinator)に対応するLocal Coordinatorを会議開催国の会員のなかから選んで委嘱する慣行になっており、次の方々をお願いしてあります。

- 第1部会 蜂屋欣二(林試)
- 第2部会 大庭喜八郎(林試), 小林富士雄(林試)
- 第3部会 山脇三平(林試)
- 第4部会 半田良一(京大)
- 第5部会 須藤彰司(林試)
- 第6部会 土井恭次(林試)

大会のための研究集会の編成はすでに各部会ごとに進められているようですが、ご希望やご意見がありましたら、関連の部会のローカル・コーディネーターにご遠慮なくご連絡下さい。

第17回世界大会エクスカーションについて

本誌 No. 5 に、第17回 IUFRO 世界大会のエクスカーションのコース案をご紹介します。広く会員のご意見を求めてきたが、その後、昭和54年4月に発足したExc. 部会で検討を重ね、このほど次のようなコース案(14コース)をまとめた。先にお知らせしたコース案との主な変更は次のとおりである。

(1) 専門コースは旅費があまり高額にならないよう、また、海外からの参加者が団体旅行として行動する機会が多いことを考慮して離日日を合わせるため、エクスカーションの日程を原則として4泊5日とした。

(2) 専門コースに参加し難い出席者が気軽に参加できるよう2泊3日のゼネラルコース(第13、第14コース)を設けた。

今回の案は、全国の会員に知らせるためあくまで大筋を決めたということで、今後各コースごとに関係各機関と打合せ、現地調査を行なって、実行上の可否を検討することとなり、細部についてはなお種々手直しを必要としようが、この際各コースの内容を紹介することとした。Exc. 部会では会員のご協力により十分な成果があげられることを期待している。

これとは別に、大会会期中に京都周辺を巡る日帰り旅行については目下2、3のコースについて検討されている。

なお、組織委員会ではできるだけ早く各コースのリーダーを委嘱するべく努力しておりますが、当面は、これまでコース案づくりに当たってきたコーディネーターを窓口にして検討を続けることにしていますので、ご了承のうえご協力下さい。

エクスカーション・コース案内

第1コース：冷温帯天然林

青森恐山、大畑のヒバ、八甲田のブナ、秋田水沢のスギの各天然林を巡り、これらの更新、生長などの施業について紹介する。また、能代木工団地において、これら天然木の日本独自の利用について紹介する。このほか、ブナ天然林の休養林としての施業、秋田スギ人工造林地の施業についても紹介する。

観光面では十和田湖遊覧、恐山の見聞、浅虫、焼山の温泉に宿泊し、みちのくの秋を楽しむ。

(コーディネーター、蜂屋欣二・林試)

第2コース：林地肥培

大分・熊本・福岡の三県にまたがり、スギの肥培効果

を幼齡林、壯齡林、原野造林地、間伐との関係、連続施肥など種々のケースについて、また、広葉樹肥培例としてクスギ林を紹介し検討する。また、小国林業、照葉樹林の林相、竹林施業、緑化木の生産、大分県林試の機構と研究など九州地方の林業を多方面にわたって紹介する。

観光面では別府地ごくめぐり、阿蘇山、福岡市を遊覧するほか、ぶどう狩りで一時を楽しむ。

(コーディネーター、川名 明・東京農工大)

第3コース：治山治水

伐採の繰り返しによって生じた田上山のはげ山山腹工事、人工過密都市神戸市をまもる六甲山の崩壊山腹工事、急峻な火山日光男体山の山腹工事など日本の治山治水の代表例を紹介するほか、50年の歴史をもつ瀬戸の東大量水試験地を訪ねる。

観光面では東照宮、中禅寺湖、奥日光と日光国立公園一帯を遊覧する。

(コーディネーター、石川政幸・林試)

第4コース：亜寒帯林(トドマツ、エゾマツ)

富良野東大演習林、定山溪営林署管内天然林、苫小牧北大演習林、林試北海道支場などを訪ね、天然林の更新と保育、人工造林、林業研究を紹介するほか旭川の遺立林産試、製紙工場で道産材の利用とその研究を紹介する。また、野幌森林公園を訪ね、北海道開拓の歴史と森林のかかわりをみる。

観光面ではこれらの旅行をつうじ、日高山系、札幌、中山峠、支笏湖、洞爺湖など雄大な北海道の自然と風物に接する。

(コーディネーター、原田 洸・林試)

第5コース：暖・温帯林

九州林木育種場、小国、人吉の林業地を訪ね、採穂園、精英樹展示林、マツノダイセンチュウ抵抗性品種の育種などの育種事業とその研究を紹介するほか、小国、オビのスギ林施業、アカマツザイセンチュウ被害林の状況、シイタケ栽培、熊本県の林業指導と普及、林試九州支場の林業研究など九州の林業全般にふれる。

観光面では別府の地ごくめぐり、阿蘇火山、熊本城、水前寺公園などを遊覧するほか、別府、阿蘇、えびの高原などの温泉に泊る。

(コーディネーター、大庭喜八郎・林試)

第6コース：森林樹病

富士山5合目、茅野、諏訪、小諸などの林業地を巡り、亜高山帯樹種の病害虫発生状況について検討するほか、

カラマツ落葉病抵抗性検定、カラマツ、モミの心朽れ、鳥獣試験の状況についてもふれる。また、静岡県林試では苗畑病害虫、マツノザイセンチュウ病、食用菌栽培について紹介する。このほかヒノキ造林地や楽器製造工場を訪ねる。

観光面では浜名湖、富士山、箱根、軽井沢、浅間の鬼押出しなど、湖、火山、温泉保養地とバラエティに富んでいる。

(コーディネーター、小林享夫・林試)

第7コース：森林害虫

関西林木育種場、智頭林地、広島県林試などを訪れ、松くい虫抵抗性育種、スギ、ヒノキ人工林の穿孔虫被害など中国地方の害虫被害の状況と防除を紹介する。また、鳥取の砂丘造林、大山鳥取大演習林のアカマツ、ブナ林、シイタケ栽培なども紹介する。

観光面では鳥取砂丘、大山のほか松江城と武家屋敷、出雲大社、平和公園、宮島などを訪ねる。

(コーディネーター、片桐一正・林試)

第8コース：林道網と森林作業の機械化

三重三瀬谷、木曾赤沢、浅間山麓長倉山国有林、沼田機械化センターなどを訪ね、これら山岳林における造林、伐木造材、集材などの森林作業の機械化と林道技術について紹介し、論議する。また、関町森林組合、赤沢自然休養林、木曾ヒノキ製材工場、平沢の漆工場などにも立寄り、林業経営、木材加工の一端も紹介する。

観光面では鳥羽の真珠養殖、伊勢神宮参観、中仙道馬籠、妻籠、白樺湖などを周遊する。

(コーディネーター、福田光正・林試)

第9コース：林地利用、森林調査、林業経営

名古屋西部港、段戸、天竜、箱根、富士山麓などを巡り、外材、国産材の流通システム、国有林の経営、民有林の経営と森林組合の活動、風致林施業などを紹介するほか、固定試験地、リモートセンシングなど森林情報の活用法を検討する。

観光面では伊豆箱根、富士山、河口湖などを周遊する。

(コーディネーター、中島 謙・林試)

第10コース：木材工業

伊勢、名古屋西部港、刈谷、浜松などの木材加工工場を訪ね、木材の切削技術、大規模な製材、合板製造、高度な加工技術を駆使する家具、楽器製造を紹介する。一方、吉野において、良質材の生産施業とその材の日本独自の利用をみるほか、法隆寺、伊勢神宮などの木造建築をつうじ、日本人と木材のかかわりを紹介する。

観光面では奈良、吉野、鳥羽、伊勢などを周遊する。

(コーディネーター、筒本卓造・林試)

第11コース：木材建築

奈良の古い神社仏閣、姫路城などをつうじ、日本の古い木造建築物を見学するとともに、大阪、岡山では建築現場を訪ねて在来工法の仕組みを紹介し、その他の工法を対比させながら現在日本の木造住宅建築について検討するとともに、その関連木材加工技術についても紹介する。

観光面では奈良、広島市の平和公園、宮島を遊覧する。

(コーディネーター、山井良三郎・林試)

第12コース：森林レクリエーション

岐阜市の百年公園で都市・都市近郊の緑化保全について論議したのち、赤沢、大峰、戸隠、湯の丸などの休養林を巡って施業方針、市民のレク利用などを紹介する。また、上松貯木場、木曾漆器館、カラマツ林施業など当地方の林業、木材利用についても案内する。

観光面では岐阜城、鶴岡、妻籠、富士山と樹海などを見るほか石和でぶどう狩を楽しむ。

(コーディネーター、野村 勇・林試)

第13コース：伝統工芸、木材工業

美濃の和紙、郡上の炭焼き窯、高山の漆、箱根細工など日本の伝統的木工芸とその加工技術を見るほか、高山の家具工場、浜松の楽器工場において近代的な木材利用をみる。

観光面では高山、箱根を案内する。

(コーディネーター、岩下 睦・林試)

第14コース：林業経営と自然公園

伊勢神宮林、天竜民有林の施業と経営のほか清水港における外材流通システム、大規模製材工場を紹介する。また、伊勢・志摩、富士の両国立公園を観光をかねて紹介する。

(コーディネーター、玉井晟也・林試)

委員会の動き

★運営委員会関係

- 54. 12. 19 第1回アナウンスメントの確定原稿をウイーン本部に発送。
- 54. 12. 26 部会長会議(林試)：募金関係状況報告、各部会現況報告、ローカルコーディネーター会議開催打合せなど。
- 55. 1. 10(前) Exc. 部会(林試)：コース案検討、こんごの関係機関等との連絡について。
- 55. 1. 10(後) 部会長会議(林試)：募金関係状況報告、第1回アナウンスメント日本語版作製の手順打合せ、林業関係外国雑誌へのPR方法検討など。

★募金委員会関係

国際学術会議を開催する場合、その開催準備、運営および関連諸行事に必要な経費は、会議の規模にもよるが、きわめて多額なものになるのが通例である。しかしながらこれらの経費を参加者個人から徴収する参加会費だけでまかなうことは、個人としての負担できる額に限度があり、きわめて困難である。それゆえ、経費の大部分を一般の寄付金に依存せざるを得ないため、大会の成否はいつに募金の成行き如何にかかっているといても過言でない。したがってこの大会を成功させるために、昨年4月林業団体の役員の方々のお骨折りにより、ユフロ第17回世界大会協力が設立され、鋭意募金準備が進められて来たことは、すでに IUFRO-J NEWS No. 8, 9でお報らせしましたが、組織委員会におきましても協力の協力により、昨秋募金委員会が設立され、下記のように第1回委員会が開催された。

<第1回>54. 11. 14 永田町ビル、グリーン倶楽部において開催。議事に先立ち林野庁長官代理として猪野指導部長あいさつ、柴田協力会会長代理として若江委員(日本林業協会常務理事)による協力会発足から現在までの経過説明があった。

議事: 1) 組織委員会運営要綱にしたがい塩谷委員(東農大)を委員長に選出。

2) 土井事務局長より大会準備状況の説明があり、募金に関しては協力会において大綱が決められたこと、当面のスケジュール、募金額全体の規模などが明らかにされた。

3) 次いで委員長司会のもと下記のことが審議された。

① 募金委員会のあり方: 募金委員会は募金事務を委嘱する日本学術振興会に対する窓口であること、募金規模、募金方法等募金に必要な事項を審議決定すること、募金業務に関する各種資料の取りまとめ、報告書の作成を行なうこと、協力会と協力して効率的に募金業務を進めることなどが確認された。

② 募金規模について: 協力会によって決められた募金目標の割当てによると、全体の大会予算規模を273,000千円とした場合に、協力会としては、一般経済団体に対し100,000千円、林業中央団体に対し45,000千円、地方団体に対し25,000千円の寄付を要請することになった。また当事者である林試、大学など研究機関に対しても30,000千円の募金に努力するよう要請された。それをうけて、林試、各大学に対する努力目標の割当てが検討のうえ、決定された。

③ 大会準備、運営予算と募金額について: 寄付金額の見通しが立たないと、大会準備運営の予算は立たない

わけであるが、会場、同時通訳、宿泊輸送関係の経費をつめて行く段階で、基金の見通しもついてくると思われるので、その時点で審議を進めることにした。

第1回委員会以後の経過

委員会の決定にもとづき、各大学に対する大会準備状況の説明と基金協力方のお願いを土井運営委員長と岩下運営委員が手分けして行なうと同時に、各大学の先生方のご意見を承わった。その結果、各方面からの基金がさくそうし、混乱を生ずるおそれが多分に考えられるので、その辺の交通整理と募金方法について、1月25日に開かれる第2回募金委員会において検討することになった。

なお基金にあたって、民間企業などからいただく寄付金の内容が、あまり明確でないと思われるので、次に若干の説明を加えてみる。

寄付金の内容について

今回の国際会議においては前述のようにかなり多額の寄付金に依存せざるを得ないが、一社当りの寄付金額が比較的少額であれば、会社などの法人から「一般の寄付金」として集めることは可能である。しかし、ほとんどの場合、額が大きくなるため、「指定寄付金」として大蔵大臣の指定を受けなければ、所要の寄付金を集めることは困難である。

1) 「一般の寄付金」(法人税法第73条第1項の規定による)

会社等の普通法人、協同組合等及び人格のない社団等における「一般の寄付金」の損金への算入限度額は、次のとおりであって、この限度額内の寄付金であれば損金として認められ、法人税は課せられない。

$$\left\{ \left(\frac{\text{資本金等の額}}{\text{金 額}} \times \frac{2.5}{1000} \right) + \left(\text{所得金額} \times \frac{2.5}{100} \right) \right\} \times \frac{1}{2} = \boxed{\text{一般の寄付金損金算入限度額}}$$

2) 「指定寄付金」(法人税法第37条第3項第2号の規定による)

公益法人等で大蔵大臣が指定したものに対する寄付金(いわゆる「指定寄付金」)は、金額損金への算入が認められる。

ただし本大会組織委員会は法人格を持たないため、「指定寄付」の指定が受けられないので、募金業務の一切を日本学術振興会に委嘱することにより、同指定が受けられることになる。

3) 「特定寄付金」(所得税法第78条第1項の規定による)

前記の2種類の寄付金は会社等の法人に依存する分であるが、篤志の個人から寄付をうける場合もあり得るわけである。この場合「指定寄付金」としての指定をうけ

てあれば、その基金団体に個人が寄付した場合は、次の限度でその個人の課税所得金額から控除をうけることができる。すなわち、次の限度内の個人寄付金には所得税がかからないことになっている。これが「特定寄付金」といわれているものである。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{特定寄付金の額} \\ \text{(所得の25\%を)} \\ \text{限度とする} \end{array} \right\} - \{1 \text{万円}\} = \text{所得控除額}$$

例えば、500万円の所得者が125万円(所得の25%)の寄付をしたときは、1万円を差し引いた124万円について課税所得金額からの控除が認められることになる。

<第2回>55. 1. 25 永田町ビル, グリーン倶楽部にて開催, はじめに土井運営委員長によるIUFRO大会準備状況の経過報告があり, 大会スケジュール, 募金目標額の割当て, ファーストアナウンスメント, エクスカージョン・コースなどの説明が行なわれた。ついで塩谷委員長司会のもとに議事に入り, まず地方募金の調整(地方林業団体一大学・林試)について審議, 募金依頼の重複をさけるための方途が論じられた。①中央に協会がある団体は原則として中央で拠金して貰うが, 地方における個人の篤志的拠金は, これをさまたげるものでないこと, ②それぞれの地域によって事情は異なるが, ある範囲のブロックでまとまって協議することにより競合をさけうること。

拠出の方法については, 募金予約あるいは拠金の具体的な手続きなど募金に必要な情報を, 事務局で早急に取りまとめ, 要領の徹底をはかることにした。これからの日程としては, 3月末の募金予約の第1回締切りを目途にして, 3月上旬(10日からの週)に中間的に委員会を開くことにした。

★協力会関係

(昭和55年度総会および第6回委員会) 55. 1. 25 永田町ビルグリーン倶楽部にて開催。54年度事業報告として, IUFRO募金達成のための委員会を毎月1回開催し, 業界募金計画, 林業団体募金割当, 大会時の展示の可能性の検討, 地方団体募金割当などを行なった旨報告があった。ついで54年度決算報告があり, これらを一括承認, 引続き募金の計画通り達成のための55年度事業計画ならびに予算案が提案され, これを原案どおり可決, 役員の変更が行なわれ, 会長重任のほか, 他の役員も原則として重任された。

以上で総会を終わり, 直ちに第6回委員会に切換えられ, その後の募金関係経過報告がなされた。土井運営委員長からも大会準備状況の説明があり, 募金方法について若干の質疑がかわされた。なお募金活動について協

力会は, 特に一般経済界と林業中央団体に対して協力することにした。

★林業史シンポジウム開かれる★

第6部会の分科会S6.07の林業史に関するシンポジウムが, 昨1979年9月24日から28日まで, フランス, ナンシーのENGREF (Ecole Nationale du Génie Rural, des Eaux et des Forêts, 森林・水系専門過程校一大学院大学) で開かれた。主テーマは次の3つであった。

- 1) 林地と林分の歴史
- 2) 森林利用と開発の歴史
- 3) 林業政策史

参加者による報告の2, 3をひろうと次の通りである。

- 17世紀のブルターニュ領主の森林利用と経営
- 7月王政下のフランスの林業問題
- トルコ国有林における使用権
- ウェルス林地における炭焼作業の歴史的重要性
- アメリカ合衆国における林政史

この期間の後半の27日に, 2班に分かれて, 林業問題と歴史を関連させた, バスによる往復200kmの小旅行が実施された。2班のうち, ナンシー東部への旅行の班は, 第1次世界大戦のおり, 最激戦地だったベルダンまでの見学であった。

シンポジウムの正式参加者は約80名であったが, ENGREFへの留学生の参加まで加えると, 90名ほどの人数にのぼった。フランス人が多かったが, ついでヨーロッパ圏の研究者が多く, 東南アジアからは2名だった。うち日本からは, 自費参加の形で筆者が参加した。

集会には同時通訳はつかず, 要旨集としてテーマ毎に, 仏, 英, 独の3カ国語で要約されたものをまとめた資料を渡され, またこの3カ国語により, 自由に質疑が行われた。1人10~15分程度の報告と, 5~10分前後の質疑があった。

シンポジウムはENGREFのJ. GUILLARDとM. DEVEZEの両先生が, 1人の美人秘書の助けをかりただけで, 会議の運営, 準備, 進行, 小旅行引率案内, 宿泊, コンバ等すべてに, 自ら具体的に細かに, 精力的に働かれ, 感銘深かった。

コンバは2日目の夕方簡単に行われた。また申込みにより市内の一般ホテルも予約できたが, 大半はこの大学の宿泊施設に, 大変安く(1泊朝食付1,300円)宿泊することができた。会場設営, 宿泊等すべて簡単で, 気持がよかった。また節電, 節暖房は当然のように実施されていた。

(林業試験場 小林 裕)

IUFRO-J 会員の募金額 ほぼ当初の目的を達成

1981年第17回世界大会開催の準備資金として、昭和53年10月以来、IUFRO-J 会員個人を対象にご寄付をお願いしてまいりましたところ、このほど丸一年を経過して、ほとんどの加盟機関から多額のご寄付をおよせいただき、昭和53年度総会・幹事会において協議した当初の目標を達成することができましたので、本紙をかりてご報告申し上げます。

ここに会員のみなさまの絶大なご支援とご協力に対し心から感謝するとともに、お取りまとめいただいたご関

係の方々のご苦勞に対し厚くお礼申しあげます。

本大会も余すところ1年余りとなり私ども関係者は、この大会を成功させるため鋭意努力中でございますので、今後とも格別のご協力を下さるよう重ねてお願いいたします。

記

(収入)

寄付総額 4,635,000 円

(寄付人数 753 人)

(寄付口数 2,295.5 口)

昭53.12~昭54.12までの預金利息24,341 円

(支出)

払込手数料 800 円

現在額 4,658,541 円

IUFRO-J 第17回世界大会機関別寄付明細書

昭和54年12月28日現在

機 関 名	人 数	口 数	金 額	備 考
北海道大学農学部林学科・林産学科・演習林	35	98	196,000	
岩手大学農学部林学科	8	37	74,000	
山形大学農学部林学科	12	41	82,000	
宇都宮大学農学部林学科	12	38.5	77,000	
東京大学農学部林学科・演習林	41	89.5	179,000	
筑波大学農林学系・農林工学系	18	55.5	111,000	
東京農業大学農学部林学科	16	52	104,000	
東京農工大学農学部林学科・林産学科	20	70.5	141,000	
日本大学農獣医学部林学科	12	55	110,000	
新潟大学農学部林学科	12	42	84,000	
信州大学農学部林学科	10	32	64,000	
岐阜大学農学部林学科	14	31	62,000	
静岡大学農学部林学科	25	74	148,000	
名古屋大学農学部林学科・林産学科	33	90	180,000	
三重大学農学部林学科	18	54	108,000	
京都大学農学部林学科	16	52	148,000	
京都大学木材研究所	14	42	84,000	
京都府立大学農学部林学科	17	42	84,000	
島根大学農学部林学科	17	33	66,000	
高知大学農学部林学科	16	25	50,000	
九州大学農学部林学科・林産学科	25	99	198,000	
鹿児島大学農学部林学科	13	38	76,000	
琉球大学農学部林学科	16	42.5	85,000	
王子製紙(株)林木育種研究所	6	23	46,000	
諸戸林業研究所	6	10	20,000	
林業試験場	321	1,029	2,058,000	
合 計	753	2,295.5	4,635,000	

IUFRO NEWS No. 26 (1979) 抜粋

研究集会の予定 (No. 9 でご紹介したものは省きます)

- S 1 (部会集会) (前号参照) ギリシャ, 1980. 9. 25~10. 3 (日程変更)
- S 1.01.04: "樹木の肥大生長の生理的基礎" オーストリア (インスブルック), 1980. 9. 9~12
- S 1.07.09: トピックス [燃料材のための造林地, 農業・放牧と組合わせた木材生産, 企業造林, 立地の衰退と林木の単一植栽による立地の改良, 外来樹種と固有樹種, 造林地のシステムと技術] プエルトリコ (予定), 1980 年のおそい時期, 論文提出期限は 1980 年 5 月 31 日
- S 1.08.00, S 6.02.00: "森林・牧野における鳥類ポピュレーションの推定" アメリカ (モンテレー), 1980. 10. 26~29
- S 2.01.00, S 2.03.05: "将来のオウシュウアカマツ林業" ポーランド (コルニク), 1980. 9. 29~10. 4. 主なトピックス [マツ林の生態, 汚染環境下でのマツ林業, 機械化の生物学的結果, マツの選択, マツの扱い方, 将来予想されるマツ利用法など]
- S 2.02.08, S 2.02.09, S 2.03.01, S 2.03.10, P 2.02.01: "早成樹種の遺伝的改良と生産性" ブラジル (サンパウロ), 1980. 8. 25~30. 主なトピックスは [将来のための育種戦略, 材質にたいする種, 産地, 施肥法の影響] であるが, 別に (a) ユーカリ以外の熱帯樹種の産地, 育種, (b) ユーカリの種, 産地, 育種, (c) ユーカリの造林と生産性, の 3 分科会が計画されている。
- S 2.05.00: "林業における寄主-寄生者間相互作用の遺伝" オランダ (ワーゲニンゲン), 1980. 9. 14~21
- S 2.06.01: 課題未定 オーストラリア (ブリスベン), 1983. 8. 25~9. 1. この集会は, 同じ年の 8. 17~24 に予定されている第 4 回国際植物病理学会にひきついで計画されている。
- S 2.06.12, S 2.07.07: 課題未定 フィリピン (ロスバニョス), 1981. 8. 26~9. 4, この集会は第 17 回ユフロ世界大会の直前に計画されている。
- S 2.07.03: 課題未定 オーストリア (ウィーン), 1980. 10. 6~10
- S 2.07.06: "立地特性と鱗翅目, 膜翅の森林害虫のポピュレーション" イギリス (スコットランド, ドーノッチ), 1980. 9. 1~7
- S 2.09.00: "地中海・温帯の森林生態系にたいする大気汚染の影響" アメリカ (リバーサイド), 1980. 6. 22~28

- S 2.09.00: (森林にたいする大気汚染被害の専門家の第 11 回国際集会) オーストリア (グラズ), 1980. 8. 31~9. 6
- S 3.01.01, P 4.02.01: "ラジータマツの間伐, 収穫, 生産性, および費用" ニュージーランド, 1980 (場所, 日程は未定)
- P 3.01.00, P 5.01.00: "林業エネルギー" スウェーデン (Jönköping), 1980. 9. 29~10. 3, この集会は次のような 3 部からなっている。(I) エネルギーを目的とした木材の収穫と利用についての会議, (II) 木材燃料 '80-展示とエキスカージョン, (III) IEA/IUFRO 合同ワークショップとエキスカージョン。
- S 4.01.00: "固有樹種の混交林における収穫量研究における生長" 東南アジアで行なわれる予定であるが, 場所, 時期は未定。
- S 4.04.00: 課題未定 ポーランド (ワルソー), 1980. 6. 1~6
- S 4.04.00: "国内における丸太材供給, 需要のバランス" スウェーデン (ストックホルム), 1980. 8. 11~15
- S 4.04.04, P 4.07.00: "森林経営計画, 現状と将来の方向" アメリカ (ブラックスバーグ), 1980. 8. 18~20
- S 6.01.00: 課題未定 アメリカ (場所未定), 1980. 6. 30~7. 9

各集会についての連絡先は省略しましたので, 関心のある方は事務局までお問い合わせ下さい。

お詫び

先に発行しました「IUFRO」ユフロのあらましのパンフレットの記事中, ユフロ加盟機関リストの中で, 名古屋大学農学部林学科は名古屋大学農学部林学科・林産学科の間違いです。お詫びして訂正します。

組織委員会事務局の所管郵便局の変更

国立林業試験場の所管郵便局が今年 1 月から変更になり, それにともない組織委員会の宛名が次のようになりましたのでお知らせします。なお, 住所は従来どおりですので念のため申しそえます。

〒305 筑波農林研究団地内部郵便局私書箱 16 号
林業試験場内 ユフロ事務局

IUFRO-J NEWS No. 10

昭和 55 年 2 月 25 日

編集: 国際林業研究機関連合-日本委員会事務局

発行: 農林水産省林業試験場